

幼児教育史学会会報 第16号 Web 版

目 次

第9回大会の開催要項とお誘い・・・・・・・・・・大会準備委員会
新入会員の自己紹介・・・・・・・・浅井百子・安部貴洋・川本太郎・藤崎
亜由子・水引貴子・大須賀隆子
教育関連学会連絡協議会の結成・・・・・・・・・・太田素子
寄贈図書／事務局から



第9回大会の開催要項とお誘い

第9回大会は2013年11月30日(土)に青山学院女子短大で開催します。これまで原則とされてきた12月の第1土曜日より1週間早いので、ご注意ください。大会の前後にも企画があります。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

なお、このあとの大会案内は学会のホームページに適宜アップします。

【開催要項】

1. 期日：2013年11月30日(土)

2. 会場：青山学院女子短大 北校舎3階(あるいは2階)など

3. 日程

11月29日(金)		30日(土)		12月1日(日)	
12時半～5時	資料センター見学	9時～	受付	9時半～12時半	研究会
1時～1時半	幼稚園見学	9時半～1時	研究発表		
2～6時	特別図書閲覧	1～2時	昼食		
		2時～4時半	シンポジウム		
		4時45分～5時半	総会		
		5時45分～7時半	懇親会		

4. シンポジウム

テーマ：保育制度論の比較史研究——欧米諸国を中心に——

司会：高田文子(白梅学園大学)

提案者：梶瑞希子(聖徳大学)、村知稔三(青山学院女子短大)、未定1名

指定討論者：小玉亮子(お茶の水女子大学)

趣旨説明：日本においてそうであるように、近年、欧米やアジア諸国においても保育改革が最重要課題のひとつとなっている。とくに本学会の特性である歴史研究の分野においては諸外国における保育制度改革の動向を、その歴史的背景をふまえて分析することが、現在そして今後を見通すうえで必須の課題である。本シンポジウムでは主に欧米諸国を取り上げ、各国に特有の歴史的課題と諸国に共通する保育の質向上をめざす政策の双方について考えてみたい。

5. 参加費・懇親会費(前納方式は採りません。受付で支払ってください)

参加費		懇親会費	
会員	1000円	会員	5000円
非会員	1000円	(うち院生)	3000円

6. 研究発表の申し込み

①申し込み方法：同封の申込書にて、電子メール、ファックス、郵送の順で選択のうえ、**9月7日(土)**までに下記にお送りください(消印有効)。電子メールの場合のみ、数日以内に到着確認のメールを返信します。

電子メール：youjikyokushi@yahoo.co.jp(学会事務局)

ファックス：03-3409-3985(青山学院女子短大子ども学科事務室)

郵送：〒150-8366 渋谷区渋谷4-4-25 青山学院女子短大子ども学科気付

幼児教育史学会第9回大会準備委員会

②発表資格：一般会員：申し込み時に年会費を納入済みのこと／新入会員：申し込み時までに入会手続きを終え、年会費を納入済みのこと。

③発表までの手順：申し込みを受領したあと、準備委員会で内容を検討のうえ、発表論文集の執筆要綱を送付します。下記の「お誘い」にあるように、本大会では発表数の調整をするため、個別に連絡を差しあげることがあります。なお、論文集の原稿の受け付け締め切りは**11月15日(金)**の予定です。

7. 問い合わせ先：村知稔三(6-①と同じ)

【お誘い(説明)】

(1)会場についてはアクセス・マップ(<http://www.luce.aoyama.ac.jp/access/>)をご覧ください。渋谷駅から宮益坂方面に徒歩で10分ほど、表参道駅 B1出口から5分ほどです。

短大の建物は青山通りに面した正門からは少し奥になります。表参道駅からですと、後掲のキャンパス・マップ(南北が逆)46番「幼稚園・女子短大門」(東門)が便利です。

同じマップ17番の短大本館から内部で繋がっている18番の北校舎を使用する予定です。

(2)①午前中に研究発表、②午後にシンポジウムと③総会、④夕方に懇親会という日程はこれまでの大会と同じです。

①**研究発表**の申し込みについては申込書をご覧ください。このところ発表件数が増える傾向にあるのは嬉しい限りですが、他方で質疑の時間があまり取れないという悩みがあります。同一会場で全参加者が同じ発表を聞く、という従来のスタイルをできるだけ維持するため、発表について事前に調整をお願いする場合があります。あらかじめ承知おきください。もちろん、この調整が必要なほど発表申し込みがあれば、のことです。

②**シンポジウム**の内容については学会創設10周年前後の諸大会で連続したものを、と理事会で考え、今回は監査の高田文子氏が中心になって立案・準備しています。

①と②の間の昼食についてです。キャンパス・マップ30番・38番の地階に食堂があり、近くには食堂やコンビニが幾つもあります。持参される方のためには場所を確保します。

③**総会**では10周年企画について協議しますので、ぜひ多く方が参加ください。

④**懇親会**は会場に隣接するアイビーホール(旧 青学会館)で開きます。普段は結婚式や各種のパーティなどが行なわれる所なので、料理や雰囲気などに少しは満足していただけるかと思います。各地の名物・名産品をお持ちいただくことも連年どおり大歓迎です。

(3)大会が早い時間から始まるため、前泊される方も多いかと思います。そのため、11月29日(金)に3つのプログラムを考えました。

⑤-1 12時半から午後5時まで、学院で最も歴史ある建物「間島記念館」(キャンパス・マップ2番／前掲の写真を参照)の2階にある**資料センター**で、学院が所蔵するキリスト教や教育・保育に関する史資料を見ていただけます。詳しくは下記の紹介文をご覧ください。

⑤-2 午後1時から1時半にかけて、短大に隣接する**幼稚園**(キャンパス・マップ5番)の施設**見学**ができます。当日の夕方には学院全体でクリスマス・ツリーの点火祭があるため、見学時間を限定せざるを得ません。秋にお送りする大会参加アンケート葉書で申し込みのうえ、午後0時50分(厳守)に幼稚園の玄関前に集まってください。

⑤-3 午後2時から6時まで、短大図書館が所蔵する**特別図書**である「オーク・コレクション」「讃美歌の初版本」(*)を閲覧していただけるようにします。ご覧になりたい方はキャンパス・マップ21番の窓口で「幼児教育史学会の参加者」とおっしゃってください。当日の開館は午後7時までですが、閲覧時間などを考えて、上記の時間としました。

(※)オーク・コレクション：絵本輸入業のオークブックセラーズ社の社主が個人で蒐集した英米の絵本と児童文学書のコレクション。1993年に受け入れたもので、総数約270点の中には児童文学の古典といふべき作品の初版本や著者のサイン入り本など、重要なものが含まれています。子どもの本の原点といわれるチャップブックから、マザーグースやトイブック類、珍しい仕掛け(ポップアップ、覗き穴、折りたたみ式)絵本も数多く含まれています／讃美歌の初版本：1800年代後半～1900年代前半にイギリスやアメリカで出版された讃美歌初版本のコレクション。全158冊(短大図書館 HP から)。

⑥大会翌日の12月1日(日)の午前中は「海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながら**フォーローする会**」の予定です。会場は正門脇の通称「総研ビル」第12会議室です(キャンパス・マップ35番)。日曜に正門は開いていますが、東門は閉まっていることにご注意ください。

第9回大会準備委員会：村知稔三、阿部真美子、中村早苗、杉本真由美



【青山学院の幼児教育と明治の日曜学校展の紹介】 中村早苗(青山学院資料センター)

まず、青山学院における幼児教育の歴史を振り返ってみたいと思います。

青山学院は、米国のメソジスト監督教会の派遣した宣教師たちを中心に創立された女子小学校(1874年)、耕教学舎(1875年)、美會神学校(1879年)の3校を源流とし、1927年に現在の地で合同し、青山学院となりました。この点について詳しくは学院史の紹介映像「地に播かれた三粒の種」(<http://www.aoyamagakuin.jp/history/mitsubu/>)をご覧ください。

スクーンメーカーによって1874年に麻布本村町で始められた女子小学校は、翌年には三田北寺町に移り、救世学校に校名を変更し、生徒も年々、増えて手狭になったことから、1877年に築地居留地に移り、海岸女学校と改称しました。

1893年、同校内に W・F・M・S(婦人外国伝道会社)の教育事業のひとつとして幼稚園が開かれたのが、学院での幼児教育の始まりといえるでしょう。『青山女学院史』(1973年)にはこう記されています。

プレスビテリアン派からわが宗派に移り、はるばる大阪から招かれた高野あいを責任者として、築地の海岸女学校内に、僅か2人の園児をもって開園したのである。1人はクリスチャン書店の息子、ほかの1人は商人の娘で、4才と3才の子どもであった。

1894年の大地震で築地が壊滅したことから、幼稚園も海岸女学校とともに青山へ移転し、

園児も増え、教育内容も充実していきました。1897年の文部省訓令第12号によって青山女学院予備科下級(尋常小学校程度)の廃止を余儀なくされたため、幼稚園の卒園生が予備科に入学できなくなったうえ、政府当局の査察も厳しくなったことから、一時休園となったものの、再開されることはありませんでした。

その後、学院に幼稚園が開設されたのは1937年のことです。幼少期からの宗教教育を望む院長・阿部義宗の熱意に応えて、校友の米山梅吉の私財によって学院内に緑岡小学校と緑岡幼稚園が開かれました。幼稚園は海岸女学校・青山女学院の卒業生である米山の妻はるの寄附により開園し、彼女が園長になりました。主任には青山女学院の卒業生・田村忠子が招かれ、「芸術的で家庭的なキリスト教主義による幼児教育が始められ」(『青山学院緑岡幼稚園 1937～1944』1983年)しました。1944年、東京都の休園命令により休園を余儀なくされ、翌年5月25日の山の手空襲によって園舎は全焼し、再開の望みは絶たれました。

その次に幼稚園が開かれたのは1961年です。一貫教育を望む院長・大木金次郎によって開設され、現在に至っています。開設時の2年保育は1995年に3年保育に延長されました。

幼児教育史学会の今大会に合わせて、青山学院資料センターでは、所蔵する緑岡幼稚園や日曜学校に関係する資料など、幼児教育と教会教育に関する展示を計画しています。日曜学校の資料については『教会教育の歩み——日曜学校から始まるキリスト教教育史』(NCC 教育部歴史編纂委員会、2007年)の口絵にも掲載された明治期の美しいカードが多数ありますので(下記を参照)、ぜひご覧いただけたらと思います。

なお、資料センターは創立時からの学院史関連資料を収集・保管・公開し、建学の精神の高揚とその歴史への理解を図ることを目的としています。さらに明治キリスト教関係図書・メソジスト教会関係資料の収集・公開を行ない、日本のプロテスタント・キリスト教界史研究などに寄与することも目的としています。詳しくは、資料センターのホームページ(<http://www.aoyamagakuin.jp/history/mcenter/>)をご覧ください。





【新入会員の自己紹介】

(1)「光」の図像に着目した「教育」表象に関する教育思想研究

浅井百子(青山学院大学大学院教育人間科学研究科博士後期課程)

かつて識字率が低い時代においては、図像というメディアを通して人々の感覚に訴え、思想や道徳を伝えていく、または読み解く力は重要な能力でした。壁画、教会のステンドグラスに描かれた聖書の一場面などは、文字を読むことのできない者への重要な思想を伝達するものでした。

近代公教育の普及により読み書き能力が向上し、文字による伝達が優位になりましたが、本研究は、感性に訴えかけるリテラシーに再度、注目することにより、20世紀以来の映像産業時代に始まるメディアの発達とその氾濫の中で生きる現代社会において、メディアを通して人がメッセージを読みとく道筋を検証することをめざしています。

道徳や思想を伝える図像が数多く描かれ始めたのは、印刷技術が発展し、活版印刷によって大量に版画が出版された16世紀からです。同世紀から翌17世紀にかけてのネーデルラントでは特に大量の版画が印刷されました。私は、そこで製作・販売されたエンブレム・ブック(モットー・挿絵・散文などの組み合わせにより徳・悪徳といった抽象概念・観念を図案化し、本としてまとめたもの)や絵画に注目し、いかに「教育」に関するイメージが図像化され、人々に広まったのかを分析し、当時の教育観や子ども観を明らかにしたいと考えています。

図像に描かれる教育イメージは動物・植物の姿へと象徴化されることが多いのですが、ここでは、教育イメージが「光」のアレゴリーへといかに象徴化されているかを、ヘラルト・ダウの「夜の学校」(1623年)とチェーザレ・リーパのエンブレム集『イコノロギア』(リチャードソン版、1779年)における光表現をもとに見ていきます。

1613年にライデンに生まれたダウはレンブラントの工房で3年間、修業を重ね、光の繊細な表現に長けた画家でした。「夜の学校」には、ランプに照らされながら勉学に励む学校の生徒の様子が描かれています。その光表現に注目すると、前方の生徒は教師とともに熱心に勉学に専念しており、その姿はランプの光に照らされています。このようにダウは光の明暗によって勉学に励むものと励まない者を区別し、「学び」のイメージを光と結びつけています。

リーパの『イコノロギア』は人間の性質・能力、自然界の事物、書芸、学問を寓意的人物像で表現したものであり、エジプト、ギリシア、ローマの神話、キリスト教の世界の物語などをもとに、ヨーロッパ精神の統合と思想体系を確立しようとしたエンブレム・ブックです。そこでは「学習(Study)」の象徴として擬人像が描かれており、その姿は長い巻物を読みながら必死に学習

するものです。隣の鶏は「寝ずの晩」を象徴し、擬人像が夜明けまで勉強に励む様子と一致しています。さらにこの擬人像に降り注ぐ光は「学びにふさわしい態度」を象徴しています。

このように光のイメージは「学習」というイメージと結びつきながら、教育の理想像を語っています。図像学に注目することで、そこに表される教育思想を読み取り、子ども観を解明していくつもりです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(2) デューイの教育思想と幼児教育

安部貴洋(八戸学院短大幼児保育学科)

八戸学院短期大学、幼児保育学科の安部貴洋と申します。

昨年の4月に、青森県八戸市にある八戸学院短期大学に勤務することになりました。そのことがきっかけで幼児教育に携わるようになりました。それまでは、日本の戦後教育に大きな影響を与えたデューイ(John Dewey)の教育思想、そしてここ数年は東北を中心とした生活綴方、また国分一太郎の研究を行ってきました。学校教育と子どもの生活、経験と言語を主たるテーマとしています。昨年の4月から現勤務校で幼児教育を担当することになり、幼児教育のもつ明るさ、保育者と子どもの関係の豊かさに驚くとともに、これまでの研究の不十分さを改めて痛感させられました。今後は、幼児教育を学びつつ、幼児教育の関連からデューイ教育思想、そして生活綴方を問い直していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

(3) 西洋古代の哲学・思想史から幼児教育史へのアプローチ

川本太郎(筑波大学大学院人間総合科学研究科後期博士課程)

昨年、入会させていただきました川本太郎と申します。それでは、私の現在の所属に関すること、関心のある研究テーマについて紹介させていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

現在、私は筑波大学の後期博士課程に在籍し、教育基礎学を専攻しております。私の専攻領域は教育哲学です。

以前、私は古代ギリシアの代表的な哲学者であるソクラテス・プラトンの哲学に見られる教育論に興味を持ち、東京学芸大学の修士課程に入学致しました。修士論文では、プラトンの作品のなかで『ポリテイア』篇を取り上げ、その教育論を考察しました。この対話篇は第1巻から第10巻で構成されており、全巻を通じて教育に関する事柄が多く語られております。そのなかで第10巻の「詩人追放論」に着目しました。これは古代ギリシアにおいて教師とされた詩人と教科書とされた詩の機能を分析し、その上で国家にとって有益でない詩、詩人を国外追放しなければならないとプラトンが主張する箇所です。当時、社会において道徳的基準をつくりあげ絶対的な地位にあった詩人と詩を非難する当箇所は、プラトンの教育論の核心部分であります。私は、第10巻の構造分析をするとともに詩が魂にどのような影響を与えるかを考察致しました。

今後、関心のある研究テーマと致しましては、プラトンが初等教育について議論する際に詩の役割を認めており、第10巻の詩人批判と比較検討したいと考えております。またプラトンは、子どもの「遊び」の重要性を指摘しております。今後は「遊び」と教育、「遊び」と魂の関係について研究に取り組んでいきたいと思っております。私は古代の哲学・思想史から幼児教育史にアプローチしていきたいと考えております。会員みなさまからご指導、ご助言をいただければ幸いです。

次回開催される大会に是非参加させていただきたく考えております。

(4) 日本の幼児教育史における自然教育の系譜

藤崎亜由子(大阪成蹊短大児童教育学科)

発達心理学を専門としている私は「ヒトと動物の関係」に関心をもち、自然生命体との交流がもたらす発達の意義について研究しています。心理学の理論上の問題としては生物概念の発達やアニミズム、擬人化などを扱っています。具体的には、イヌ・ネコをはじめとしたペット動物との関係や、ウサギなどの学校飼育動物、擬似生命体(ロボット)との関わりなどについて調査しています。近年は特に、自然生命体の中でも「虫」に焦点をあてて研究を行ない、虫という身近な「野生」との付き合いのなかで、子どもがいかにして生命観や自然観を育むかに関心を寄せています。

教育学や幼児教育史については全くの素人なのですが、保育内容「環境」の変遷に興味を持ち、今回この学会に入会しました。現在は、母校でもある奈良女子大学の附属幼稚園に現存する大正時代の保育資料などをまとめつつ、日本の幼児教育における自然教育の系譜を辿っています。幼児教育史全体の中での位置づけや意義を理論化していくにはまだ力およばすですが、カイコを飼育したり、オタマジャクシすくいをしたり、アリを観察することなどが散りばめられた保育案を眺めつつ、小さきものに対する日本文化特有の感性を感じずにはおられません。

日本の自然教育には長年の蓄積がありますが、近年の身近な動植物との交流の喪失、地球規模での環境変化、地域社会性をもった伝統文化の喪失などの状況に対応した理念や方法論は十分に確立されているとはいえないのが現状です。また、日本の幼稚園における動物飼育の普及率は9割近いのですが、衛生管理や繁殖管理など多くの問題を抱えています。今日の幼児教育現場では「生きものとのふれあいが子どもの情操教育・知的発達に重要な役目を担っている」という漠然とした共通認識はあるものの、それをいかにして進めてゆくかの理念や方法論は十分に確立されておらず、不都合が生じているというのが現状なのではないかと思います。私自身、保育者養成に携わる者として、自然教育や環境教育は今後の重要な課題のひとつだと感じています。ぜひ本学会で学ばせていただければと思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

(5) 音楽史からみた子ども観の変遷

水引貴子(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程)

このたび貴学会に入会させていただいた、お茶の水女子大学博士後期課程の水引貴子と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私はこれまで、子ども観の変遷を音楽史の視点からも捉えることはできないかと考え、研究に取り組んでまいりました。修士論文では、17世紀イギリスでの公開演奏会の誕生にみる子どもと大人の区別意識の萌芽や、当時活躍していた神童に投影されていた子ども観について検討しました。

博士後期課程では、修士論文でのテーマをさらに深めた研究を進めています。例えば、19世紀のイギリスで刊行されていた音楽新聞や音楽雑誌の記事を分析し、当時のイギリスにおける神童の受容特徴を、ドイツでの神童研究と比較しながら明らかにしました。また、同じ方法で、イギリスでは子ども向けの演奏会がいつ頃どのような目的で催されるように

なったのか、ということについても明らかにしています。

そしてこれまでの研究をふまえ、最近注目しているテーマは、「音楽が教育的意義を帯び始めたのはいつ頃なのか」ということです。現在、音楽は私たちの教育活動にとって当然のように必要とされています。とくに幼稚園や保育所などでは、音楽は子どもたちの生活とともにあります。音楽が教育や保育活動に不可欠なのはなぜなのかという思想的背景と、この動きはいつどこで起こり始めたのかということに興味を抱いています。

私が研究対象としているイギリスのロンドンは、公開演奏会の誕生以来、各国から音楽家を招待して数多くの演奏会を催したり、楽譜や音楽関連書物の出版の中心地でもあったりしたため、音楽の消費大都市でした。また、19世紀には学校教育でも音楽が教科として導入されるようになり、世間でも、子どもに正しく音楽を聴かせるという目的をもった子ども向けの音楽会も開かれるようになりました。このような事実から、私は19世紀後半に「子どもの教育にとって音楽が必要である」という思想の流れが生まれたのではないかと仮説を立てています。そして、学校教育と社会における音楽の捉え方が明らかになるなかで、家庭では音楽が教育とどのような関連で語られていたのか(または語られなかったのか)、ということを知りたいと考えました。そこで現在は、当時の育児書をあたり、音楽に関してどのように記述されていたのかを明らかにするため、作業を進めているところです。貴学会には非常に興味深い研究をされている先生がたくさんおられます。ぜひ歴史研究の手法を学ばせていただきたいと思います。ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

(6) 創造美育の歴史的意義

大須賀隆子(帝京科学大学こども学部こども学科)

私は保育学・教育学と臨床心理学の重なる領域を研究対象としており、現在は創造美育(創美)の歴史的意義と継承について研究しています。

創美の中心人物である久保貞次郎(1909～1996年)は1938～1939年に欧米視察旅行に出かけ、欧米の児童画に圧倒されます。「彼らの絵は、共通して羨ましいほどひとつの確立した自信を表現している。独立の精神に溢れている。徹底力をもっている。それでいて軽快なものを失わない。描かれたものは、一筆、一刷ゆるがせにしていない。絵を愛して描いている」一方、日本の児童画は「淋しい、弱々しい、のびのびしない、あるいは乱暴、投げやり、不徹底、概念的、形式的無表情である。絵が断片的でまとまりがない。自分でものを考えていない。(略)難しい点に逢着すると、それを解決しようと闘わないで、避けてしまう」と。そして、日本と欧米の児童画の根本的な違いは「描こうとする精神」にあると結論づけます。日本の子どもに「描こうとする精神」のないことがいかに「不幸」なことであるかを嘆き、それを1952年の創造美育協会の設立へと結実させていきます。

創美は、戦後の焼け野原にブラックが立ち並ぶ時代に、子どもの創造性と個性の伸長を謳い上げ、その実践を映画にして世に問い、衝撃的にデビューします。それだけに1950年代半ば～1960年代初頭には批判もかまびくしく、その代表が日本作文の会の国分一太郎(1911～1985年)による次のようなものでした。「美術教育というものはなんか子供達の心の内部にあるやつをぱっぱと吐き出させさえすれば、人間の感情が解放されてこれが抑圧というものに対して抵抗して行くような基礎とか土台を開いて、それがなんか人類が本来持っているところの清らかな情操を育てることになって、やがてそれが原爆、水爆を用いて戦争をするという状態をなくして行く、こういうふうだけに考えてはならないと思う

わけです」。

今あらためて久保貞次郎、北川民次、ハーバート・リードらの著書を読んでもみると、国分の批判は創美運動の本質を喝破していると思われます。こうした「創美論争」の行方を問うことは、昭和から平成にかけての保育や教育の大きな変動の方向性を見定めるうえでも重要な課題です。

ところで、1990年に久保は再び次のように嘆きます。「ぼくが児童画運動から手をひいてから(1972年)、すでに20年がすぎている、およそ25年間の熱狂であった。(略)創美運動の主張と実践はいくらかは教師のあいだに影響を残したかもしれないが、いまでもこの主張の後継者が奮闘しているというニュースを耳にしない」。

ところが、今日でも創美の実践を地道に継続している保育園や幼稚園が存在しています。今日、創美の実践を継承する意義はどこにあるのでしょうか。それを見届けるために私は、1961年から連綿と創美の指導理念を実践している静岡県の保育園をフィールドワークの場としています。現在の保育現場に生きる創美の意義は、創美にまつわる内外の歴史的な文献資料に当たり、それとの往還を通して考えていくことでいっそう明確に見えてくるように思うからです。

どうぞよろしくご指導ください。



上記写真は2012年10月に「大地保育」(大中里保育園)の年長児クラス保育室の一隅に設けられた自由画コーナーで描く5歳女児の姿です。

【教育関連学会連絡協議会の結成】

太田素子(副会長、和光大学)

4月20日(土)本郷の東大教育学部で教育関連学会連絡協議会結成大会が開かれ、本学会から太田が出席しました。私たちに関連した点を中心に簡単にご報告します。

昨年10月、日本学術会議教育学関連部門理事である佐藤学・秋田喜代美・鈴木晶子・金子元久4氏の呼びかけで、この協議会の準備会が開かれました。そして学術会議に登録している教育学関連の学会・研究団体約180団体の内、70団体余りが今回この協議会に参加しています。結成総会では規約・内規が協議・承認され、理事10名が投票で選ばれました。事務局は日本教育学会の中におかれます。

日本学術会議会員が今回このような呼びかけを行なったのは、大型研究(年間20億以上)の予算が人文科学・社会科学にもつき始めているなかで、教育学でも翻訳事業や各種の研究基盤整備事業を立ち上げる必要があるのではないか、教育学の社会的な発信力を高める努力が必要ではないか、という問題意識からだそうです。緩い連絡協議会ですので大型研究の具体化までにはまだ時間が懸かりそうですが、日本保育学会・日本乳幼児教育学会・日本保育協会などと共同研究の端緒がこの会で拓かれるのなら、歓迎すべきことと思います。会費は、通信費・地方からの運営委員交通費など実費を中心に、各学会対等に年間1万円です。

結成総会では、「教育学関連学会連絡協議会」なのか、「教育関連学会連絡協議会」なのか(「学」を入れるかどうか)という点が議論になりました。教科教育に関わる学会が多く、「教育学」と括られることに違和感のあるところがあったようです。当面はシンポジウムなどに取りくむようですが、共通の問題関心の土台を築いていくことがまずは大切だと思います。

【寄贈図書】

小川博久『保育者養成論』(萌文書林、2013年)。301ページ、2625円。

立浪澄子『実践力を育てる——「学生主体の子育て支援」』(ななみ書房、2013年)。187ページ、2520円。

【事務局から】

2014年12月までの私どもの任期中における**第1の課題**である本年の第9回大会については「大会の開催要項」をご覧ください。青山学院に関係する複数の会員で準備を始めています。

第10回大会はお茶の水女子大学で開催の予定です。これまで大会は首都圏とその他の地域で交互に開いてきましたが、記念大会のため、東京での開催が続きます。

第2の課題は、第9回から第10回まで、必要に応じてさらに第11回までの大会を中心に、学会創設10周年の取り組みを進めることです。具体的な提起は第9回大会時の総会で提起し、論議いただきます。大会のシンポジウムもその一環ですし、それと関係する企画として、教育史学会の昨年の第56回大会(お茶の水女子大学)でコロキウム「幼児教育史研究の現在——日本とドイツ——」を持ち、太田素子理事と大崎功雄会員が報告してくださいました。この企画の中心となった湯川嘉津美理事によれば、「40名近い参加者があり、日本・西洋・東洋の幼児教育史研究者が一同に会して、議論や意見交換を行うことができた」とのことです。なお、同学会の本年の大会は10月13～14日に福岡大学で開かれ、同じ趣旨のコロキウムを持つ予定です。

第3の課題は日常活動をいっそう組織的なものとするということです。会員数が増え、理事会・事務局の作業も増えつつあるため、初代・第2代の事務局長が練り上げてくださった活動の進め方を発展させる必要があります。この点についても総会で協議いただきます。

最後にお問い合わせとお知らせです。①今号の「新入会員の紹介」の執筆依頼は短時間でしたので、次号に掲載を延期せざるを得ない会員がみえます。できるだけ多くの新会員に書いていただきたいので、800～1200字を目途に執筆のうえ、学会のメールアドレスまでお送りください。②会費の納入について引き続きご協力いただけたら幸いです。③会誌投稿の締

め切りが今年から5月末日に変わっていますので、ご注意ください。

訂正：紙媒体の会報で「お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科」の表記に欠落がありました点をお詫びします。

幼児教育史学会会報 第16号 2013年5月13日／Web版 6月14日 編集・発行 幼児教育史学会事務局 村知稔三・阿部真美子 150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 青山学院女子短大子ども学科気付 Tel:03-3409-7309／Fax:03-3409-3985(ともに学会事務局) E-mail:admin@youjikyokushi.org／HP: http://youjikyokushi.org 郵便振替口座 00190-9-73668 幼児教育史学会
